

第 15 回ヴェネチアビエンナーレ国際建築展
日本館展示企画案

コミッショナー

福屋粧子

協力者

槻橋修

中村竜治

神里達博

堀井義博

協力団体

「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会

不在の街

2016年の建築ビエンナーレにおいて、日本館から世界に語りかけるテーマに、「不在の街」を設定する。

未来に向かう日本を考える上で、311以後の建築の変化をはずすことはできない。

その変化とは、絶対安全神話からこぼれ落ちる、弱く、はかないものへの強い執着だ。

震災から1年目の夏、予想をはるかに超える自然の変動によって無造作に破壊された家々、めくれ上がったアスファルト道路が散乱する道を、どうすることもできないのだという無力感で訪ね歩いた。その後4年間の間に、政府によって、また地域の人々の力によって、徐々に、生活はとりもどされつつある。

その過程で人々の言葉から浮かび上がってきたのは、我々の生活環境は、日常的で、とるに足らない、マクロな都市計画から見ればゴミのような存在の家々や小屋や船や車や仮設的なトンバックといったものから構成されていることだ。そしてその総体としてのまちも、ほかと比較してしまえばどうというほどもない凡庸さで存在しているが、それぞれのまちが、全体では小さなものの組合せによる有機的なネットワークとなっている。

小さな単位による大きな全体、はかなくも強靱な日本的なまちや建築のありかたをあらわすために、「不在の街」と「不在のかたち」を日本館に展示する。

「不在の街」は、建築家 槻橋修を中心としたグループによる被災を受けた岩手・宮城・福島の前復元模型であり、ホワイトモデルもあれば、現地ワークショップを通じて、その街にかつて住んでいた人の声や記憶が記録され手の痕跡の残る模型もある。

「不在のかたち」は、建築家 中村竜治による、極小の部材から構成された、虚と全体性を同時にあらわす空間体験となる。

2つのコンテンツを重ねあわせて相補的に館内に展示し、同時に収集された「声」をデジタルアーカイブとして重ねていくことで、その二つの横断を通じて、体験によって都市スケールから身体スケールまで往復することで、小さな単位による大きな全体の展示を行う。

「不在」は不穏な響きを持つ。だが、現在進行しているプロセスの中での「不在」に再び着目することで、日本だけでなく、世界からの来訪者にとって、人々が暮らす空間のありかた、つくられかたを問い直すことができると考えた。

「不在」なのは何か。住めなくなった街そのものか。生活主体としての我々か。未来の人か。

「不在の街」を切り口としながら、記憶・街・仮設性・自立性・持続性などに話題をひろげる期間展示を目指す。

目次

1	表紙
2	展示コンセプト
3	背景
4	提案
5	content 1 不在の街
6	content 2 不在のかたち
7	展示プラン 断面図
8	展示プラン 平面図
9	詳細
10	チーム

提案の背景 小さなものごとの世界を見つめ直すとき



陸前高田市のかさ上げ土砂用ベルトコンベアー (朝日新聞)



気仙沼市の高台移転工事現場



まちのネットワークの一部である、記録された声

震災の後、だれもが小さなものごとに向かった。

知人の無事を確認、安堵し、P2P 支援を行い、行った事もない場所で出会った人に向かって、「大丈夫ですか」と声をかけあった。

一方、新聞やニュースの中では、壮大な話、原発の封じ込め計画や、巨大な防潮堤など、多くのプランが立てられていたが、翻って、その巨大プランを自分と関係するものごととして理解するには、それぞれの人が、例えば健康への影響等、自分なりの理解の回路をつくりださなければならないほど、大きい話は心に響かなかった。

震災後、多くの建築家が地域に向かい、コミュニティから建築を考えるために、多くの街で言葉を交わした。何が必要とされているか聞き取り、もう一度暮らしをとりもどしてもらうために出来る事はなんだろうと、知恵をしぼった。

そこから4年経ち、確かに復興は進んでいる。例えば、陸前高田市では、市街地のほとんどが津波にさらわれたため、山を切り崩し、元の街をかさ上げする工事をベルトコンベアーで効率的に行っている。もちろんその過程で、多くの人の意見を聞き、それを集約して決めた方針だ。私たちの復興支援地域でも、同様に、聞き取った意見をまとめ、決定し、実行過程にうつしているし、多くの実効性のある復興支援において、同様のプロセスで物事が決まっているだろう。だが時間の変化もあり、そこに決定的なずれが生じてしまうことを何度も経験した。ボトムアップによりつくられるはずのものが、途中から集約されたトップダウンでその地域や風景の未来を決めてしまう。工事が始まって見に行くと、工事現場の途方もなさに、いつもショックを受ける。それは、被災地の復興だけではないだろう。

工事が終わった後、何が起きるのだろうか。

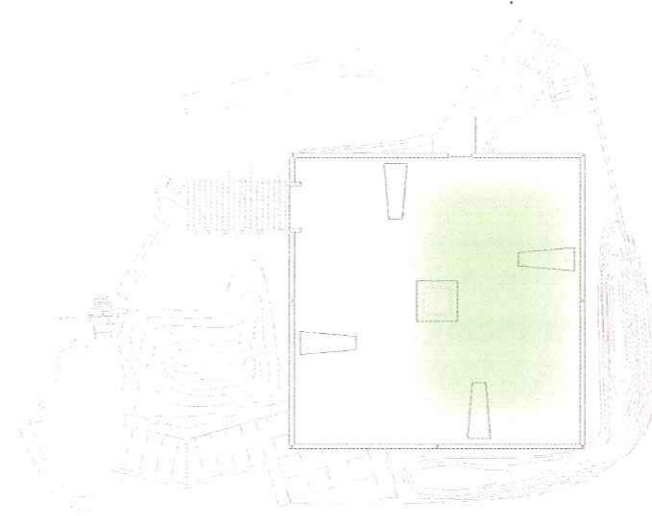
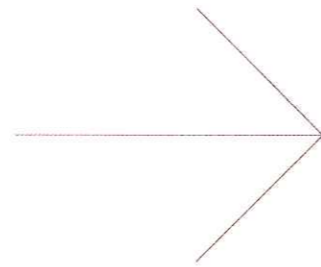
そのときこそ、もう一度、トップダウンにすり替えられる前の、それぞれの声や、記録、かたちのありかたにたちもどり、「コミュニティ」という一般的な言葉ではとらえきれない、まちごとのネットワークをつむぎなおしたい。そのためには、小さなものごとからつくられる全体性について、より議論しておくべきだろう。

この企画は震災後5年目、東京オリンピック開催5年前のものとして立てた。

当初、bottom-up/top-down というテーマであったが、単なる上記への違和感の表明ではなく、そこからの出口として「小さな単位による大きな全体」の可能性を、体験として展示することがよりふさわしいと考え、2つの、一見奇妙な取り合わせのコンテンツについて、槻橋氏と中村氏に協力を依頼した。神里氏は、科学史をバックグラウンドとして、科学盲信や迷信や暦、食品分野のリスクコミュニケーションといった科学技術と社会の関係を研究しており、科学を、一般的に信じられている絶対性とは切り離れた視点から、心理的不安と未来の住み方についての視点を提供する。堀井氏は、日本一世界の社会的コミュニケーションと建築の関係から視点を提供する。

提案

日本館の約 15m 四方の空間で
来訪者に小さな世界を見つめ直
す意味を伝える

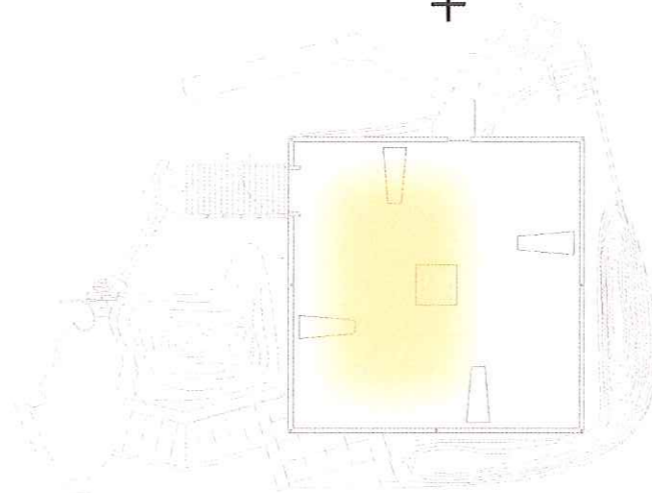


content 1
不在の街

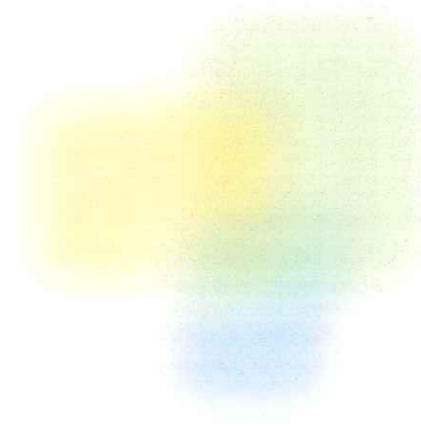


+

+



content 2
不在のかたち



ピロティ下の声のラウンジと
2つのコンテンツを重ね合わせる
スケールを横断する重層的な体験

content 1
不在の街

槻橋修

槻橋修らのグループ「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会は、震災復興支援として、2011年3月より、1/500のスケールで津波被災地域の復元模型の製作を始めた。1/500では、家は2センチ角となり、高齢者でも目で形を追い、自分の家がどこであるか探し当てられるぎりぎりの大きさである。瞬時にして2万人以上が亡くなった、岩手・宮城・福島の津波浸水地は広大であり、500m×500mを1ピクセルとして街の模型を製作すると、1m角の模型が1000ピクセル以上におよぶ。「すべての津波被災した街を模型で復元する」という当初の槻橋の構想は、無謀とも言えるものだったが、多くの建築系大学生の協力を得て、現在は約1/3の模型が制作され、ワークショップによって、地元を受け入れられている。

岩手・宮城では、津波被災し、造成工事が続く中、今はもう「街の姿が見えない」「不在の街」として、かつての街を思い出し、未来の街を思い描くきっかけを提供している。福島では、ほとんどの津波被災地が立ち入り制限区域にあるため、現場ではなく、避難地でワークショップを行う。そこでの模型は、確かに存在はしているけれども、今は近づくことができない、「自分たちが」「不在の街」として、意識されている。今回は、現在、岩手県一関市に保管されている約330ピクセルの模型のうち、70ピクセルを輸送し、展示する。

中村竜治は、2004年より中村竜治建築設計事務所として活動を開始し、建築・ディスプレイ・家具等で、リボン・ピアノ線・紙など身近な素材の物質性を最大限まで引き出し、かたちを反復させることで、空間を内包しながら、オブジェクトとして存在する希薄なかたちをつくり続けている建築家である。

一見、今にも倒れ、壊れてしまいそうな華奢さに相反して、中村の作品は家具等としての実用強度を持つように設計されている。いままでの海外の展示作品でも軽量さ・輸送性・可搬性・現地作業性への配慮があり、繊細でありながら、長期間展示に耐える計画が可能である。

製作時の造形や着彩の作業は手で行われるため、最小限の素材を用いて、遠景では非常に整然としたものにも見えるが、近づいてぐっと目を凝らしてみると、仕上がりにわずかにゆがみやゆらぎによる物質の特性が感じられる。距離のとりかたによって、冷たいミニマルさではなく、手仕事の暖かみが際立って感じられるのが、コンテンツ1との共通点でもある。

今回は、薄い素材のミニマルな取り扱いからもたらされる希薄さと、視覚的効果による多様さを、「不在のかたち」として展示する。

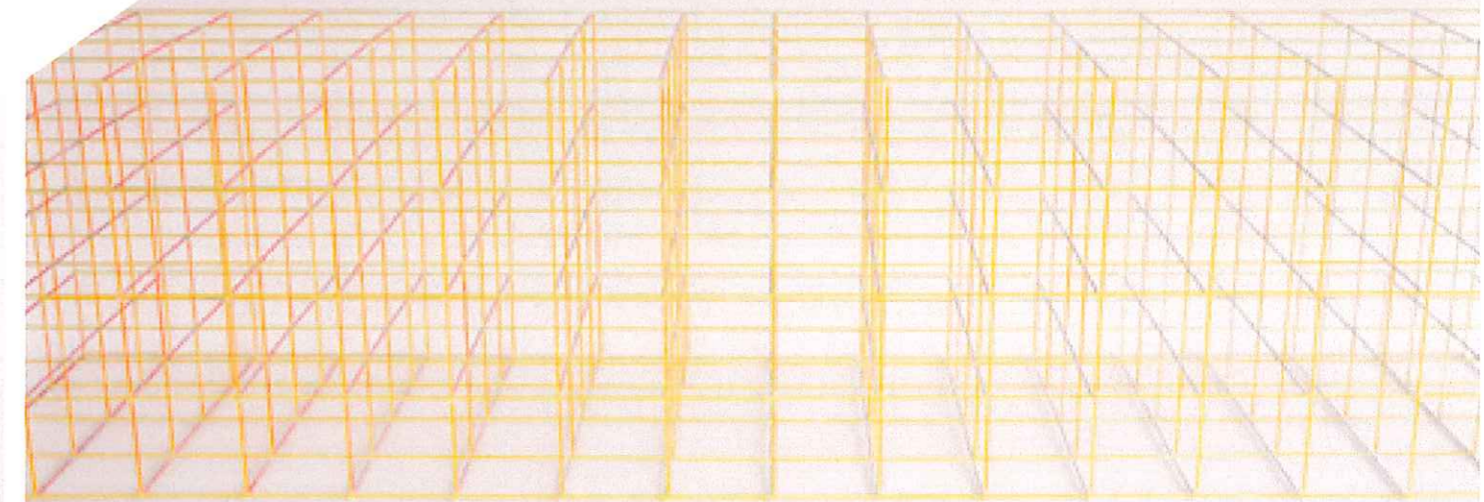
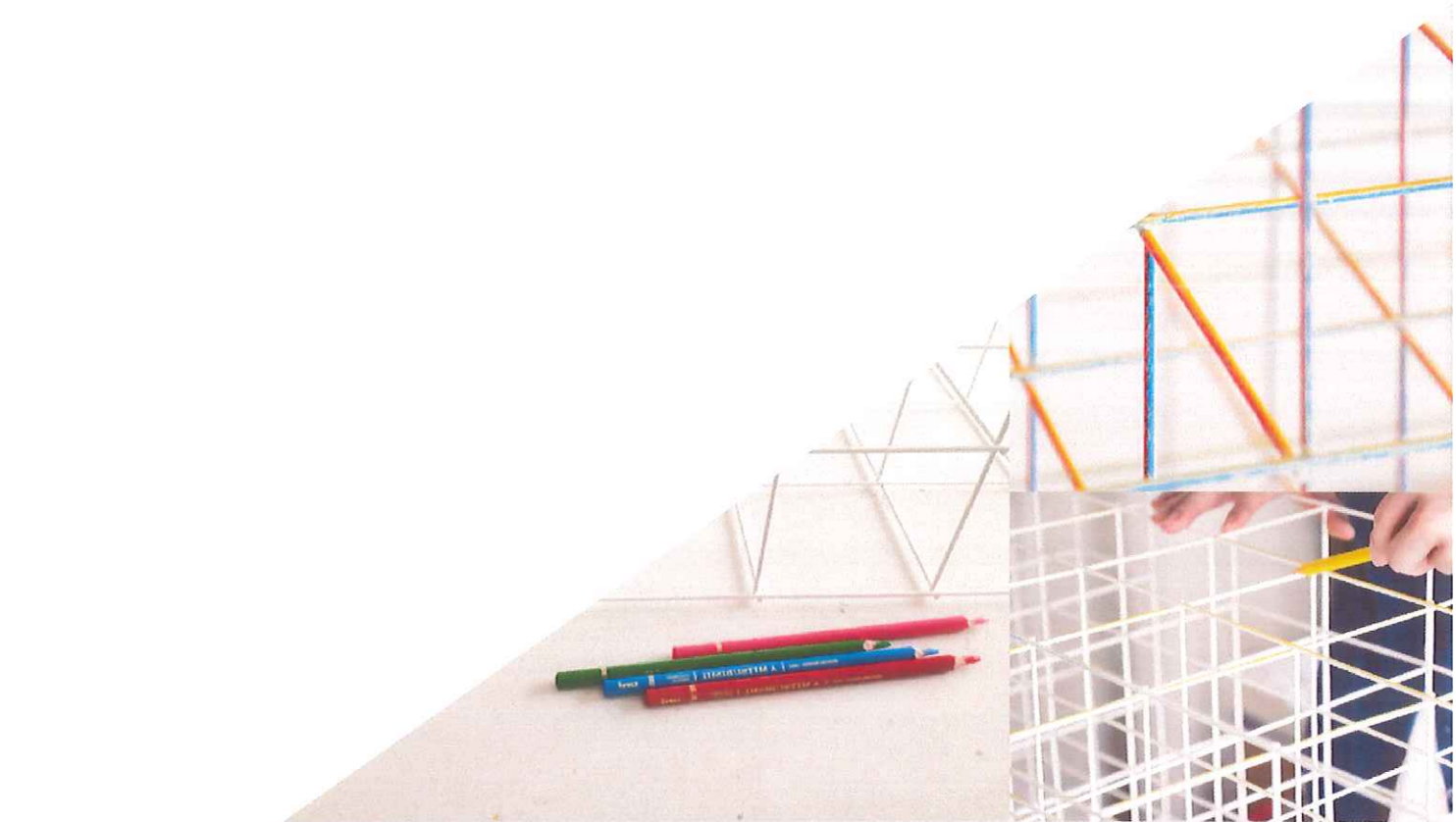
参考作品

- 1) water lily、2012年4月、ミラノサローネ、ステンレス丸棒 2.6mm+色鉛筆
- 2) dance、2013年9月~12月、豊田市美術館、ピアノ線 0.10-0.75mm
- 3) pillar、2014年9月~2015年1月、レイキャビック Hafnarhus、紙

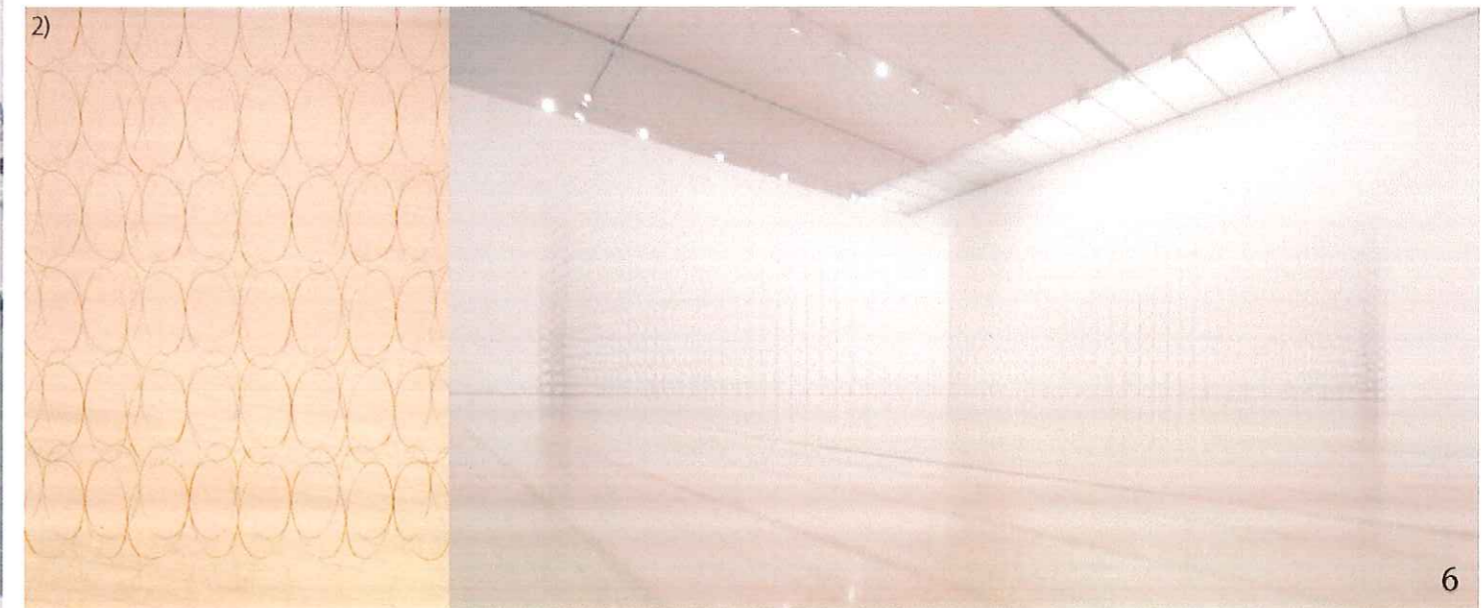
content 2

不在のかたち

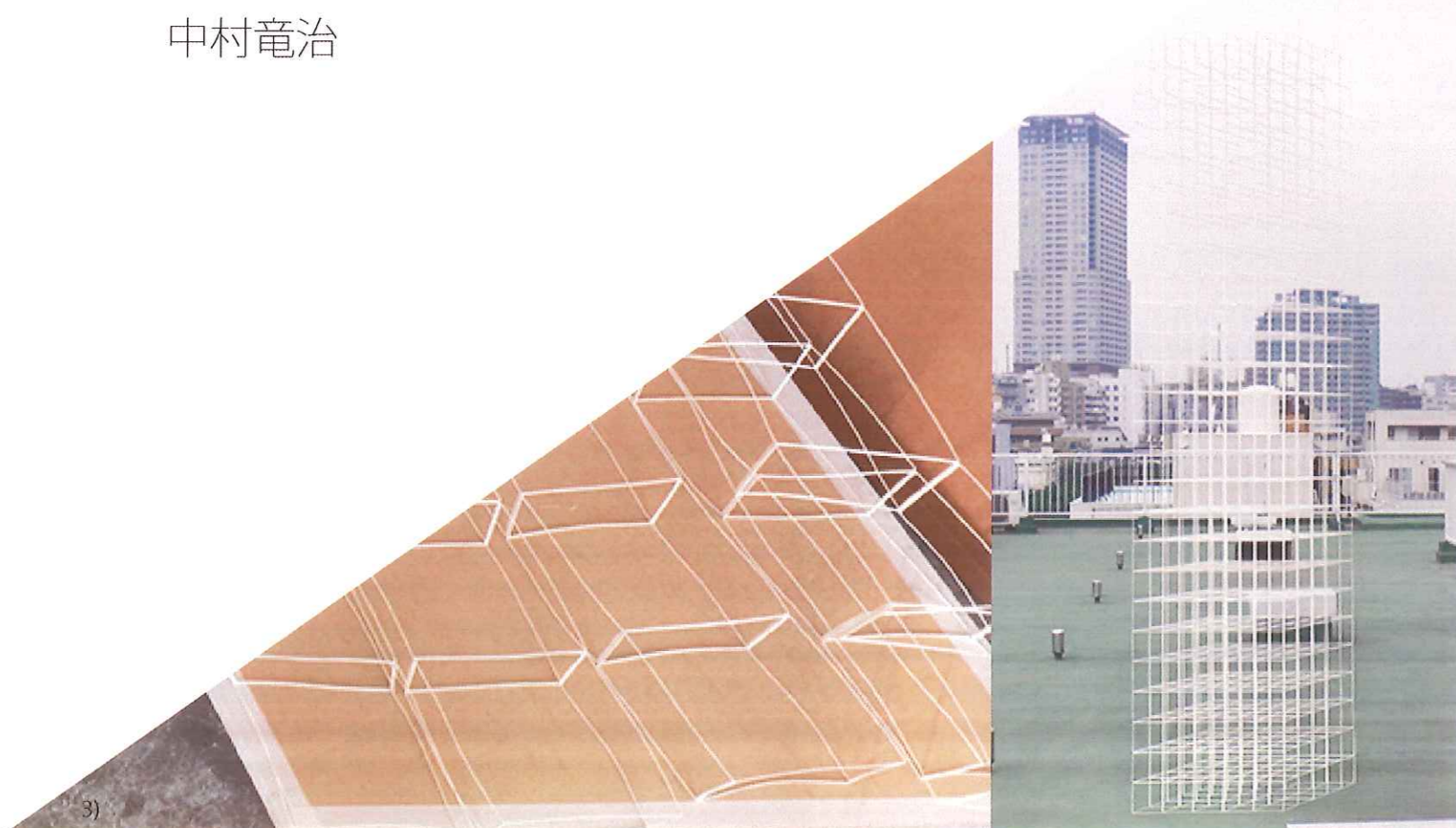
中村竜治



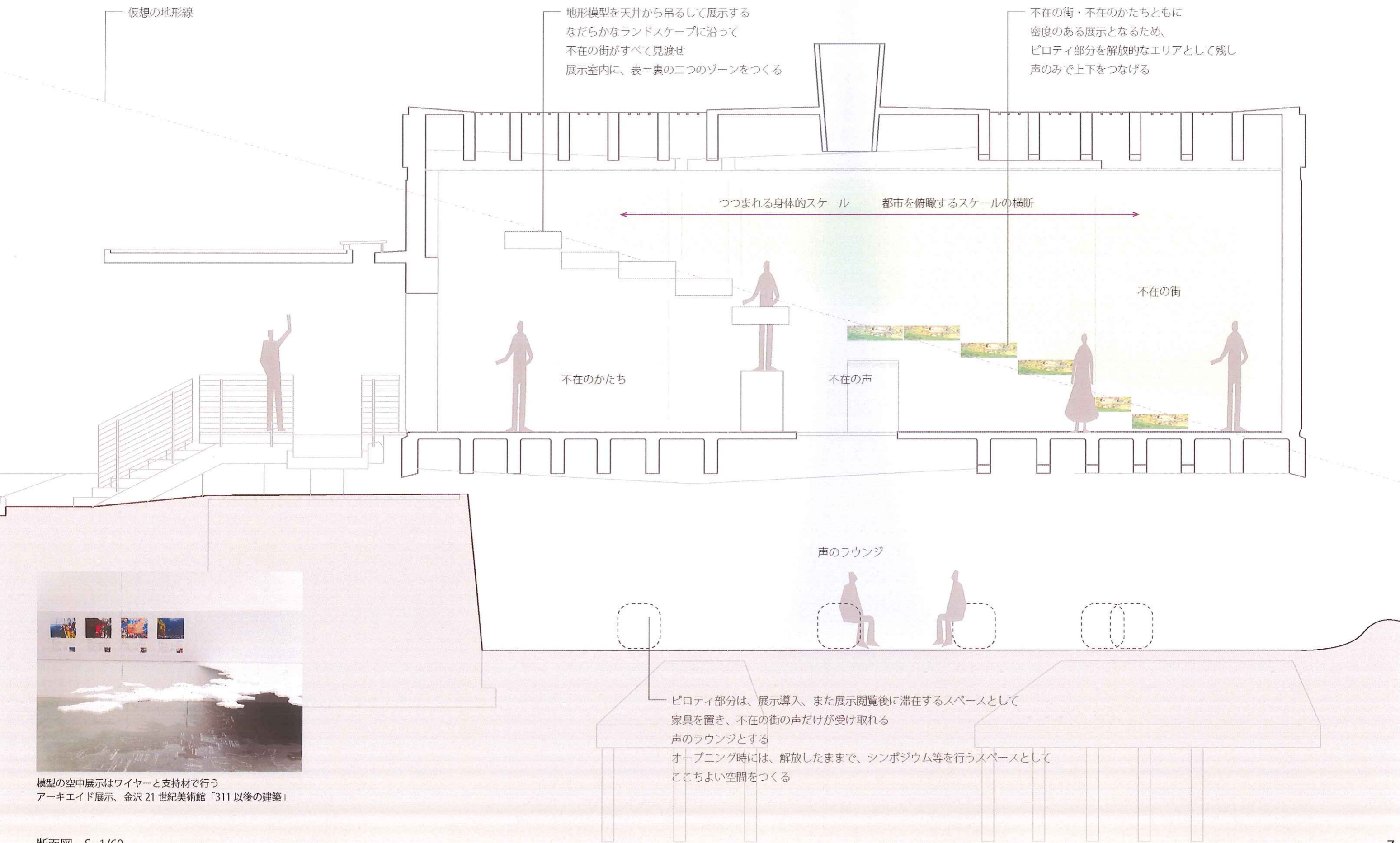
1)



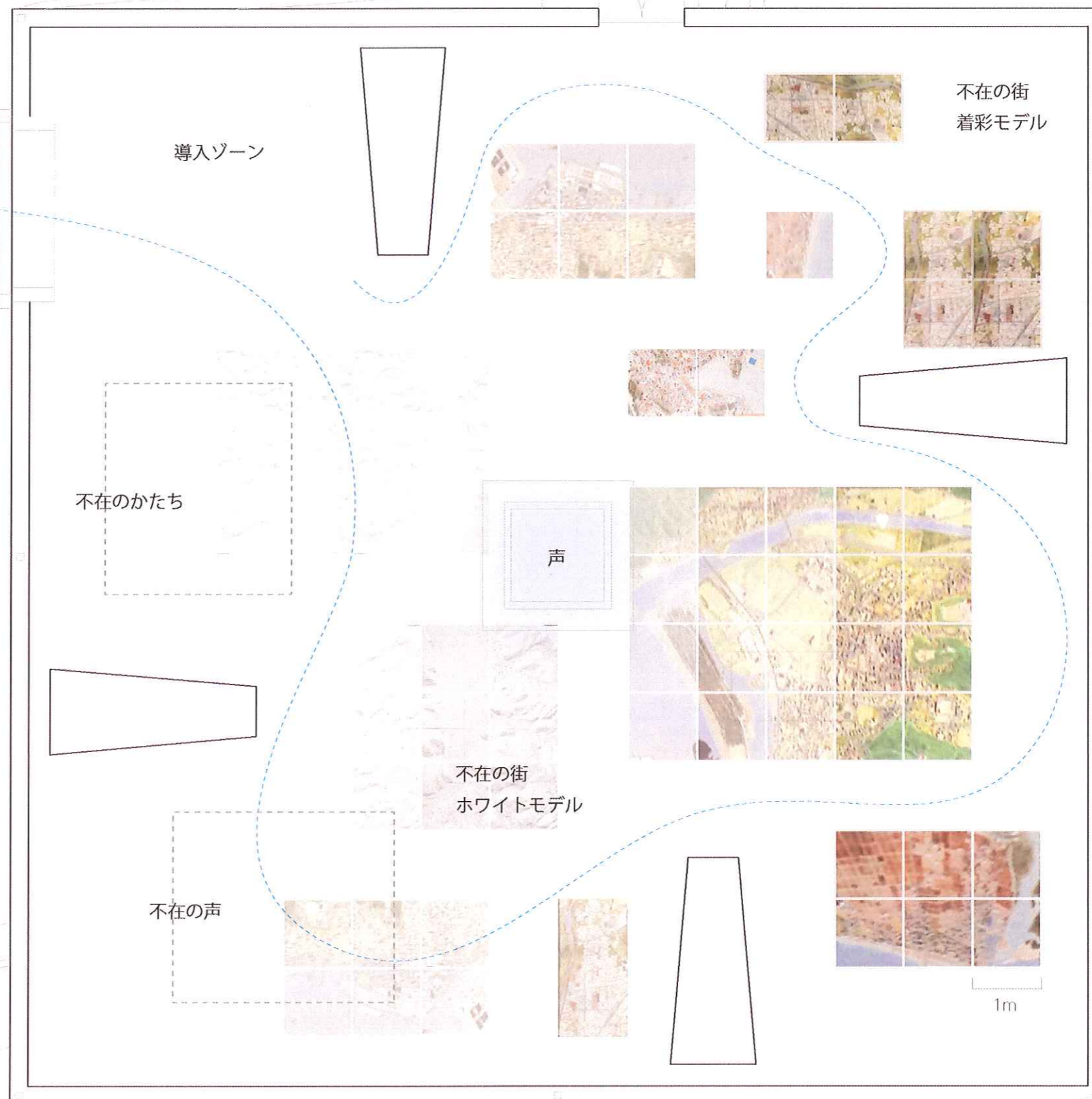
2)



3)



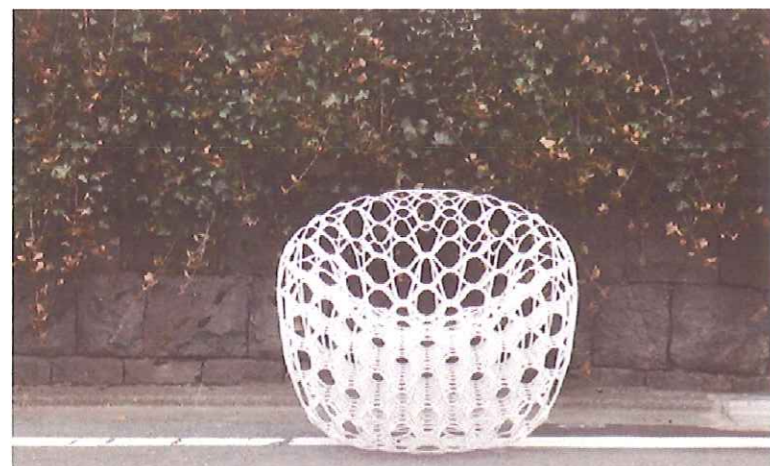
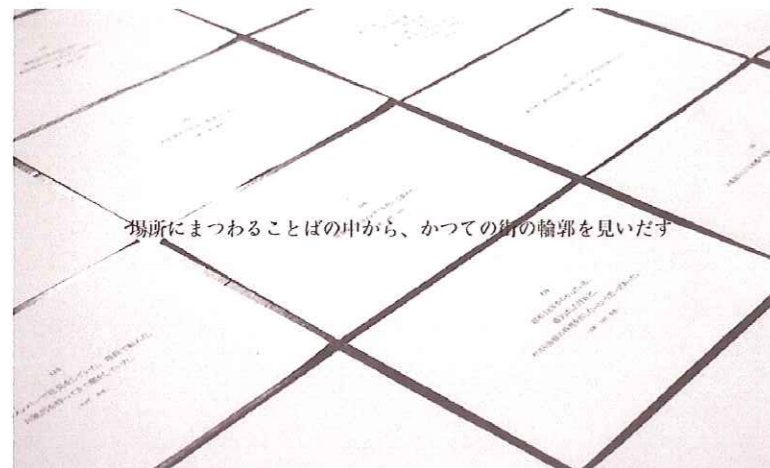
模型の空中展示はワイヤーと支持材で行う
アーキエイド展示、金沢 21 世紀美術館「311 以後の建築」



外部空間

日本館は閉鎖性の高い空間であるため、外部に向けては、ピロティ下からアプローチまでを声のラウンジとしてつくる。

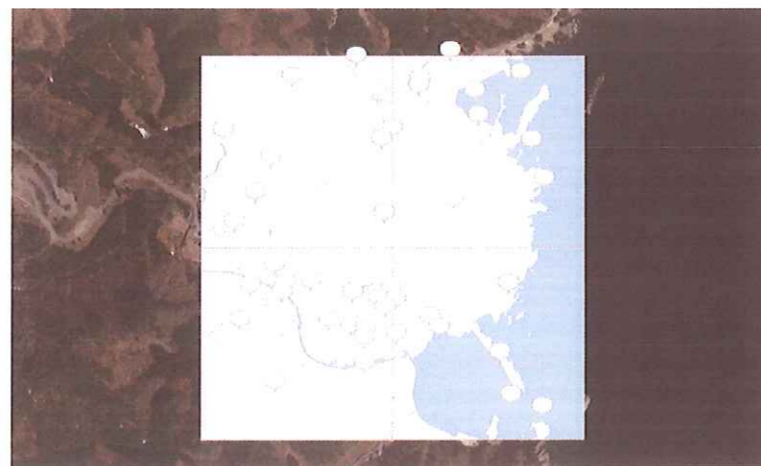
「不在の街」のワークショップで収集された「声」をもとにした街の姿を描き、一方、来館者と声を出会わせるインタラクティブコンテンツを作成することで、遠隔地でありながらも、断章形式で、日本のコミュニティに触れる体験を提供する。



期間中イベント

開会時および閉会時に、声のラウンジで、「不在の街」をめぐるセッションを開催する。

- ・都市
- ・科学
- ・災害
- ・仮設性
- ・時間差



予算概算

作品製作費	5,000,000	
作品輸送費	7,000,000	
保険料	600,000	
インタラクティブコンテンツ作業費	2,000,000	
図録製作費	3,000,000	
謝金	2,000,000	(コミッショナー謝礼、参加作家謝礼 等)
旅費	7,000,000	(事前調査出張、本番時の設営出張 等)
広報費	2,500,000	(チラシ・ポスター制作、記録・報告書制作 等)
現地経費 1	4,000,000	(現地コーディネーター謝金、アルバイト謝礼 等)
現地経費 2	5,000,000	(日本館内工事・展示設営・撤収作業費)
現地経費 3	1,000,000	(会場運営:光熱費、通信費、消耗品・備品購入費等)
現地経費 4	2,000,000	(レセプション経費・会議費)
協賛見合	-3,000,000	
合計	39,100,000	

出展作家等経歴

コミッショナー

福屋粧子 Fukuya Shoko

建築家・東北工業大学工学部建築学科准教授。修士（工学）。

1971年東京都生まれ。1994年東京大学工学部反応化学科卒業。1996年同学部建築学科卒業。1998年同大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。1999年-2004年妹島和世＋西沢立衛／SANAA(担当作品:金沢21世紀美術館・小さな家) 2005年福屋粧子建築設計事務所設立。2006年慶應義塾大学理工学部システムデザイン工学科助手（妹島和世研究室・隈研吾研究室）、2007年同助教。2010年より東北工業大学工学部建築学科講師。2012年AL建築設計事務所を共同設立。2015年より現職。

2011年3月11日の東日本大震災後、『東日本大震災における建築家による復興支援ネットワーク [アーキエイド]』 発起人となり、遠隔地と被災地をつなぐ中間支援型復興支援活動を開始する。2011年9月~2012年3月アーキエイド初代事務局長。朝日新聞社ニッポン前へ委員会委員（2013年まで）。石巻市復興まちづくり推進会議半島部アドバイザー、岩沼市玉浦西まちづくり検討委員会副委員長など。2015年「日本建築学会賞(業績)」(共同受賞)

主な空間作品に、『森のひとかけら』（インスタレーション,2009）、『梅田阪急ビルスカイロビー tomarigi』（2010）、『仮設・石巻市復興まちづくり情報交流館』（設計監修2015）など。主な展覧会企画・参加に、『ArchiFlag』（インスタレーション,2010）、『新・港村』（アーキエイド展示、新・港村 BankArt1929,2011）、『未明的雲朵：一城七街』（東北工業大学展示、台北市立美術館,2015）、『311以後の建築』（アーキエイド展示、金沢21世紀美術館,2015）、など。共同編集に、『浜からはじめる復興計画- 牡鹿雄勝・長清水での試み-』（彰国社,2012）、『アーキエイド・アニュアルレポート2011』など。

協力者

槻橋修 Tsukihashi Osamu

建築家・神戸大学大学院工学研究科准教授、博士(工学)、ティーハウス建築設計事務所主宰

1968年富山県生まれ。1991年京都大学工学部建築学科卒業、1998年東京大学大学院博士課程単位取得後退学。東京大学生産技術研究所勤務を経て、2002年ティーハウス建築設計事務所設立。2003年東北工業大学講師、2009年より現職。

主な作品に《三宮 BOS》アートワーク、《新潟県十日町市・清津川プレスセンター「きよつつ」》(2011年) などがある。主著に『旅。建築の歩き方』（編著、彰国社、2006）、『建築ノート』（No.1~No.10 監修、誠文堂新光社、2006~2014年）など。2009年日本建築学会教育賞(教育貢献)共同受賞。2011年より東日本大震災復興支援プロジェクトとして『「失われた街」 模型復元プロジェクト』を発案、監修し、2014年「放送文化基金賞」(NHK盛岡放送局と共同受賞)、2015年「日本建築学会賞(業績)」(共同受賞)、「JACE イベントアワード「想いを形に」賞」(NHK仙台放送局、河北新報社と共同受賞)。同プロジェクトは現在も継続中である。

中村竜治 Nakamura Ryuji

建築家・中村竜治建築設計事務所代表

1972年長野県生まれ。1996年法政大学工学部建築学科卒業。1999年東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修士課程修了。2000-2003年青木淳建築計画事務所。2004年より中村竜治建築設計事務所一級建築士事務所代表。東北大学工学部建築学科非常勤講師。早稲田大学芸術学校非常勤講師。

主な仕事に、『へちま』（サンフランシスコ近代美術館所蔵）、『ショートカット』（JIN' sGLOBAL STANDARD 流山）、『空気のような舞台』（東京室内歌劇場オペラ「ル・グラン・マカーブル」舞台美術）、『とうもろこし畑』（東京国立近代美術館「建築はどこにあるの？7つのインスタレーション」）、『梁』（東京オペラシティーアートギャラリー「感じる服 考える服：東京ファッションの現在形」会場構成）、『ダンス』（豊田市美術館「反重力展」）など。主な受賞に、くまもとアートポリス熊本駅西口駅前広場設計競技優秀賞、グッドデザイン賞、JCDデザインアワード大賞、THE GREAT INDOORS AWARD(オランダ)など。著書に『中村竜治 | コントロールされた線とされない線』(LIXIL出版)。

神里達博 Kamisato Tatsuhiro

専門は科学史・科学技術社会論。

1967年、神奈川生まれ。大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任准教授、朝日新聞客員論説委員。東京大学工学部化学工学科卒、同大学院総合文化研究科(科学史・科学哲学) 単位取得満期退学。博士(工学)。科学技術庁、三菱化学生命科学研究所、科学技術振興機構、東京大学大学院工学系研究科などを経て現職。文部科学省科学技術・学術政策研究所客員研究官、朝日新聞社の「論壇時評」合評委員ならびにニッポン前へ委員会・未来への発想委員会の委員などを歴任。現在、朝日新聞にて『月刊安心新聞』を連載中。

特に、近代化に伴うリスクや、自然と人間のあるべき関係を、歴史的・社会的に読み直す作業を続ける。著書に『文明探偵の冒険ー今は時代の節目なのか』（講談社現代新書、2015）、『食品リスクーBSE とモダニティ』（弘文堂、2005）、共著に『没落する文明』（集英社新書、2012）などがある。

堀井義博 Horii Yoshihiro

建築家・AL 建築設計事務所代表取締役。

1967年大阪生まれ。1989年京都市芸繊維大学工芸学部住環境学科卒業。1992年同大学造形工学専攻博士前期課程修了。1992年-2000年株式会社UPMに勤務。2000年-2002年ETHZ（スイス連邦工科大学チューリッヒ校）アシスタント・客員研究員。2005年-2011年東海大学工学部建築学科非常勤講師、2012年-2014年宮城大学非常勤講師、2012年東北大学大学院非常勤講師、2015年宮城学院女子大学非常勤講師。2012年AL建築設計事務所を共同設立。

空間やもののカタチとそのハタラキ、あるいは形式と意味作用との関係について強く関心を持っている。実務の設計活動でも執筆活動でも教育活動でも、常にそうした眼差し・関心から取り組んでいる。共著に『20世紀建築研究』（10+1別冊、INAX出版、1999）など。